

セルバンテス作、牛島信明訳「ドン・キホーテ前篇(1)」岩波文庫、岩波書店 2001年1月16日発行
を読む

1. 「遍歴の騎士殿、どうやらあなたは、この地上に存在する最も厳格にして窮屈な職業のひとつを御自分の使命となさったようすな。わたしの見るところでは、カルトゥジオ会の修道士方のお勤めだってそれほど厳しくはないでしょうからね。」
2. 「なるほど、修道士方の職務も同じように厳しいものかも知れません」と、われらのドン・キホーテがひきとった。
3. 「しかし、世の中がそれを騎士道と同じほど必要としているかということになると、そこにいささか疑問の余地がござる。
4. なぜなら、本当のところを申せば、指揮官の命令を実行に移す兵士は、その重要性において、彼に命令をくだす指揮官にいささかも劣っていないからでござる。
5. 拙者の申し上げたいの、聖職者たちはどこまでも心静かな安らぎのながて、地上の幸福を天に向かって祈り求める。
6. ところがわれわれ兵卒にして騎士たる者は、彼らが祈り求めるところを、われわれ自身の腕の力と剣先によって地上に実現し、それを守るのであるが、それも屋根の下とするのではない、そうではなくて絶えず野天に身を置き、夏は耐えがたい陽光にさらされながら、また冬は肌をつんざくような寒気のなか、霜柱を踏みしめながらのことでござる。
7. よってわれらは地上における神の代理人であり、地上において神の正義を實踐する腕であると言えよう。
8. そして戦い自体はもとより、戦いに関する、あるいは戦いにまつわることもは何事であれ、汗を流し、精魂をかたむけ、全力をつくさなければ遂行できないものであってみれば、それをおのれの使命としている者たちが、心静かな安らぎのなかで、弱き者を救いたまえと神に祈りを捧げている者たちより、はるかに苦しい生活を強いられることは明らかでござらう。
9. 拙者は何も、遍歴の騎士という職業、あるいは身分が僧院にこもっている聖職者のそれより優っていると申ししているわけではありませんぞ。

10. それどころかそのような考えが拙者の念願に浮かんだこともありませなんだ。ただ拙者自身の苦しい経験からして、騎士であることがいっそう苦勞の多い、いっそう痛い目にあう、いっそう飢えと渴きに苦しむ、そして、いっそうみじめで見すばらしく、しかも虱しらみに悩まされる職務であることを強調したかっただけでござる。
12. なにしろ、過ぎし世の遍歴の騎士たちがその生涯において大変な艱難辛苦かんなんしんくを味わったというのは疑いのない事実ですからな。
13. なるほど騎士のなかには、おのが腕の力で皇帝の位に登った者もあるが、それは間違いなく大量の血と汗を流した結果であり、しかも、そうした高位についた騎士でさえ、もしも彼を庇護してくれる魔法使いの賢人が付いていなかったとしたら、ついに野望の実現ふちかなわず、失意ちんりんの淵に沈淪するということにもなりかねなかったでしょうよ。」

P.219 ~ 221

<コメント>

2016年はドン・キホーテの作者セルバンテス没後400年でもあるので、岩波文庫版ドン・キホーテ全6巻の読破に挑戦するのに最適の年。ドン・キホーテを読まずして、ヨーロッパの騎士道精神の理解なし。是非、御一読を。一読すれば、スペインはもちろんヨーロッパの教養人がこよなく愛した作品のレベルは極めて高いことがよくわかる。

— 2016年7月11日(月) 林 明夫記 —